

「新型コロナ」その先を考える

ラオスの子どもたち、飯館村へ行く

認定NPO法人 認定に関するお知らせ



AEFA アジア教育友好協会

Asian Education and Friendship Association

フレンド会報30号

〒102-0074

東京都千代田区九段南2-3-22

アーバンセカンドビル3F

TEL:03-6265-6490

FAX:03-6265-6491

2020年7月15日 発行



AEFAの3層構造理念



「新型コロナ」その先を考える

パンデミックの中で見えてきたこと、変わること、変わらないこと

支援先の村人たちはどうしているだろうか、子どもたちは大丈夫だろうか。新型コロナウイルスCOVID-19の感染が世界的に広がる中、どうか無事であってほしいと祈る私たちのもとへ、ベトナム、タイ、ラオス、スリランカの現地NGOスタッフや子どもたちから元気なメッセージが届きました。いずれの地域／村でも陽性患者は出ていないという嬉しい報告でした。

アジアの山岳地帯や農村地帯は医療体制の脆弱なところが多く、感染が広がれば極めて深刻な状況をまねく可能性があります。また、国境を接する地域では人の移動による感染拡大リスクも大きな懸念のひとつでした。アジア各国で実施された地理的封鎖や経済活動の制限、学校の休校などの対策により、人々の生活は大きな影響を受けましたが、村人や子どもたちに感染被害が及ばなかったのは何よりのことでした。

ベトナムでは、5月25日時点で陽性326人、うち219人が海外からの入国者で、死者はゼロです。現地NGOスタッフや支援先の村人／子どもたちへの感染は確認されていません。ベトナムで4月1

日から実施された社会的隔離政策は、一部地域を除いて同月23日に緩和されました。AEFAの支援プロジェクト対象地域であるトゥエンクアン省とバクザン省は感染低リスク省とされ、通常生活に戻っています。また5月4日からはベトナム全地域を対象に、段階的に学校での授業が再開されました。ベトナム保健省は新型コロナ予防ソング(日本語で「嫉妬したコロナさん」)を制作。子どもたちは歌に合わせて楽しく手洗いをしています。

学校建設プロジェクトにおいては開校式の延期を余儀なくされましたが、式典が開催できる時期や状況を見極めつつ、建設支援を続けています。3月に開校式を予定していたイエンニン分校と、現在建設中のゴイカイ分校から寄せられた写真では、子どもたちが小さな手のひらにベトナム国旗と日本国旗を載せて、「一緒にがんばりましょう」という気持ちを精一杯表してくれました。

タイでは、5月3日からは段階的に経済活動が再開されています。非常事態宣言は6月末まで延長され、AEFAプロジェクトの



写真:左上) ベトナム・ゴイカイ分校より 左中) スリランカ・ジャヤティラカ小中学校ロックダウン直前の着工式
左下) ベトナム・ニンソン小学校の先生方より 上) ベトナム・イエンニン分校より

対象校も6月末まで休校ですが、村の封鎖は解除されています。村人、子どもたち、学校関係者、現地NGOであるラックタイ (Raks Thai Foundation) のスタッフや家族に陽性者は確認されていません。ただし感染予防の面で課題があることがわかりました。少数民族の村人たちはテレビを見てもタイ語が理解できず、新型コロナの情報や知識を得るための手段がありません。また、手洗いの習慣がなく、石けんもないのです。そこで、AEFAが支援する「農業プロジェクト」の対象村ではプロジェクト費用の一部を活用して村人への講習を実施。ウイルス感染予防のための知識を身につけてもらい、洗浄ジェルの作り方を指導しました。村の学校は、安全衛生についての学びの場にもなっています。

少数民族言語による啓蒙動画制作や、子どもたちによる啓蒙ポスター制作などのプロジェクトも計画されています。

ラオスでは、3月24日から5月3日まで国境が封鎖され、外出禁止、学校はすべて休校となりました。5月1日時点で陽性19人、死

者ゼロに抑え、5月4日から段階的に規制が緩和されました。6月1日には感染対策に留意したうえで県境を越える移動や通常勤務が可能になり、学校での授業も再開されています。

AEFAプロジェクト対象地であるサラワン県、チャンパサック県は、それぞれベトナム、タイと国境を接し、山岳少数民族も多く居住する地域です。チャンパサック県では、3月末の国境封鎖を前にタイからの出稼ぎ労働者が一気に帰国しました。この際、チャンパサック県マイバンマセル中高校(会報29号で紹介の「ARASHO」- 荒川商業高等学校同窓会の支援により建設)は臨時の検疫所兼待機施設として使われました。同校には水タンクと浄水ろ過システムも整っていたので、検疫と隔離が行われた二週間、衛生状態を保つことができ、感染者もゼロでした。このような設備がない場所では、掘立小屋を建てて待機施設としたところもあったようです。子どもたちの学習の場である学校が、今回は地域の人々の健康と衛生を守りました。

スリランカでは、他の3国と比較すると非常に厳しい規制が導



写真:左上・中) タイ・カレン族の村での洗浄ジェルづくり 左下) ラオス・臨時の検疫所兼待機施設になったマイバンマセル中高校 右上・中) スリランカ・工事現場
中断から再開へ 右下) ラオス・休校中の子どもたち

入されました。3月13日にはすべての学校が休校となり、3月18日には違反者の逮捕を伴う外出禁止令が発令され(いわゆるロックダウン状態)、生活必需品の買い物はオンラインのみ、経済活動が許されているのはライフライン関連業など政府から許可を得た業者のみとなりました。6月3日現在、感染者数は1683人、死者数は11人。コロンボを中心に主に西部海岸沿いに感染者が発生しましたが、厳しい規制措置により、感染拡大は抑えられています。AEFAの支援地域でも感染の広がりはありませんでした。5月11日からは高リスク地域以外で経済活動が再開されました。

外出禁止令を受け、AEFA支援による学校建設は一時中断せざるを得ませんでした。4月20日からは地域により日中の外出が認められるなど外出禁止令が一部解除されたため、外出禁止解除時間帯に断続的に建設作業を行いました。その後、時間の制限もなくなり、工事は順調に進んでいます。

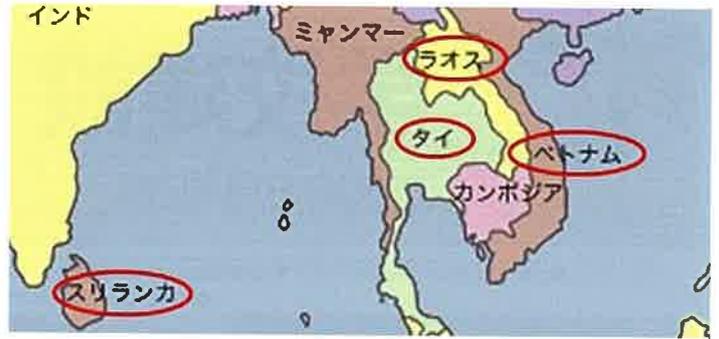
AEFA支援地域では、新型コロナウイルス感染被害を防ぐことができた一方で、新たな問題が発生しています。現地NGOからの報告によれば、人里離れた地域や経済的に困難な家庭環境にいる子どもたちが、社会的に隔離された状況下でさまざま

な危機に直面しているというのです。

村の封鎖等、地理的な移動が制限されたことにより、日雇い労働に従事していた村人たちが収入を失い、食料不足や経済的困窮が迫っています。精神的なストレスが女性や子どもへの家庭内暴力や、少数民族へのいじめにつながるケースもあるようです。また、学校が休校となったことで、子どもたちは思わぬ危険にさらされることになりました。親が畑仕事に出ている間に怪我をしたり、勉強する手段がないため無為の生活に陥ってしまったり。人身売買のリスクも高まっているようです。子どもたちをウイルスから守るだけでなく、子どもたちが安全に、生き生きと過ごすことができるよう、子どもの人権を守り、社会環境を整えることが強く求められています。

この問題に対し、ベトナムでひとつの取組みが始まりました。現地NGOのひとつであるCSD(Research and Communication Centre for Sustainable Development)が「子どもたちに安全な環境をつくる」ことを最優先課題とし、「チャイルド・エデュケーション・プログラム」を計画しています。これは、教師、親、生徒児童がともに、子どもの権利、ハラスメント、安全衛生等について学び、学校と家庭において環境を整えるプログラムです。

このプロジェクトの特徴は、大人たちへの啓蒙活動にとどまら



写真上) ベトナム・CSDスタッフ 中) ラオス・環境プロジェクト 下) ベトナム・手洗いダンス

ず、子どもたちが自らの権利や安全衛生について学び、自らをリスクから守ることを可能にする活動であるという点にあります。大人が解決する・大人が子どもを守る、というモデルではなく、子どもたち自身がより良い選択・判断をし、自分の身を自分で守ることができるようになる、という子ども主体の能動的なモデルを重視しているのです。

ベトナムをはじめAEFAが支援する各地域では、パンデミック後の社会を見据えた取り組みが始まっています。世界では新型コロナウイルスの感染拡大が続いており、AEFAの支援地域でも第二波以降への警戒と対策が続くと思われます。しかしその中でも、現地の人々は子どもたちと地域社会の未来に希望の目を向けています。子どもたちが変わること、社会と環境が変わる。そのための知識とマインドを育てる。村の学校は、基礎教育のさらにその先へと存在意義を深めつつあります。学校という「場」を生かし、子どもたちを中心とする「推進力」を育てることは、より良い社会を構築し、社会的自立への道を拓くための重要な一歩なのです。

ベトナムの子どもたちのように、日本の私たちの手のひらにも、支援先の国旗と日本の国旗とを載せて。単に支援する・されるという関係に留まらない、未来をつくる「パートナー」としての活動を形にしていきます。

AEFAの現場は、医療が脆弱で感染すれば被害が大きくなる地域のため、無事を知らせる現地NGOからの報告には、胸をなでおろす思いでした。開校式等のスケジュールは一部見直しとなりますが、各国NGOがしっかりとプロジェクトを進めてくれています。現場のことを一番よく把握しているのは各国のNGOです。信頼できるパートナーと共に活動出来ることに、改めて感謝の想いを強くしました。

少数民族の村などでは「子どもの人権」への意識がまだ低く、子どもたちのためにも現地社会の将来のためにもNGOからの働きかけが必要です。

いま現地で注目されているのは、次世代を担う子どもたちが活動の中心になり、学校から家庭・地域へと波及させていくというアプローチです。ベトナムのチャイルド・エデュケーション・プログラムのほか、ラオスの環境問題をテーマとした活動でも導入されています。AEFAとしてもこれらのプログラムを支援し、モデル・プロジェクトとしてより広く展開していければと考えています。

* * * * *

ベトナムのティエンボ小学校(トゥエンクアン省)からは、ノリノリの新型コロナ予防ソングに合わせて「手洗いダンス」をする子どもたちの動画が送られてきました。休校中に練習したそうで、コロナ禍をダンスで吹き飛ばそうという、明るく強い姿勢が見られます。休校中、先生が電話で宿題を与えたり、先生と生徒の間で日記をやりとりしたりする学校もありましたが、その日記には「早くみんなに会いたい。先生やお友達と一緒に新しい校舎で勉強したい。」という願いが書かれていました。現地の子どもたちにとって、学校がとても大切な場所になっていることを実感しました。(金子恵美)

コロナ禍による世界各国での休校措置によって、学校が子どもの教育の場というだけでなく、生き甲斐や安全を守る場でもあったことに気付かされました。AEFAの活動地域以外からも、マレーシア在住時に支援・交流していた難民の学校が休校となり、子どもたちが給食をとれずにおなかをすかせていること、親の仕事がなくなり生活に困っていることなどが聞こえてきました。休校に限らず、時代や状況の変化によって子どもの健全な生活が損なわれることのないように、子どもの人権(保護者や周囲の大人との適切な関係、基本的な食事、教育、保護を受ける権利など)についてさらに理解を広めることが重要と感じています。(服部駒子)

※本文中のCOVID-19陽性者数・死者数は、現地NGOから報告を受けた当時のデータです。2020年6月19日のWHOのデータによると各国の状況は次のとおりです。ベトナム陽性者342、死者ゼロ/タイ陽性者3,146、死者58/ラオス陽性者19、死者ゼロ/スリランカ陽性者1,947、死者11



学校建設プロジェクト

2020年6月現在



① キムソン分校



② メーパン小学校



③ ファイルーシ小学校



④ ムーパッディ小学校



⑤ ポーサレー小学校



⑥ アンラック分校



⑦ モニュー分校



⑧ アットダットカッラ・ラフラ小中学校



⑨ クアセット中学校



⑩ ホーコンナイ中学校



⑪ タンタイン1小学校



⑫ チェンサイ小学校

国名	学校名 支援者（敬称略）	ひとこと
完成	ベトナム デオムン分校 大野美之 （附属設備：福井県平章小+町田市南大谷小+紀尾井町ロータリークラブ+西脇修+リアンコーポレーション） キムソン分校 大阪府立柏原東高等学校同窓会 イエンニン分校 一家恵里	今年3月に予定されていた開校式は延期となりました。 コロナ休校の間も、子供たちは学校に早く行きたい！と日記に書いていました。 2020年度末に閉校する柏原東高校同窓会が、卒業生の思いを形に残したいとベトナムに新校舎建設を支援。 「キムソン・カシントン小学校」として誕生、校歌のメロディも受け継がれます。写真① 3月に予定されていた開校式は延期となりました。晴れの日を待ち望みながら、早速、子供たちは歓迎の踊りなどパフォーマンスの練習を始めています。
	タイ メーバン小学校 チュロコス株式会社	1月に行われた開校式では、支援者のみなさんが沖縄のカチャーシーを子供たちに教えて一緒に踊ったり、二人三脚や絵の具遊びで交流を深めました。写真②
	ラオス ファイバーシ小学校 WANG基金 藤原和博 ムーパッディ小学校 立石道博	2015年度建設プロジェクトの増設です。新校舎が出来る前は、片側の壁が無い仮設校舎で子供たちは勉強していました。先生方の団結力と、村人との協力関係も強い学校です。写真③ 新校舎とスポーツコートが整備され、子供たちの学習環境が大きく改善されました。写真④ 2月に予定されていた開校式は延期となりましたが、A E F A理事長らが訪問、交流しました。
	スリランカ イハラタルドウワ小学校 エルセラーン1%クラブ ポーサレー小学校 エルセラーン1%クラブ	2019年から建設が始まっていたプロジェクト。コロナの影響で遅れが心配されましたが、無事に新校舎が完成しました。スリランカでは7月から学校が再開の見込みです。写真⑤
	ベトナム ゴイカイ分校 株式会社カナオカ スアンバン小学校/アンラック分校 一般社団法人 ゼブラ社会貢献支援協会 カンバオ分校 エルセラーン1%クラブ バンバン分校 エルセラーン1%クラブ モニュー分校 水野恵子 （附属設備：西澤順子） コンミン分校 株式会社近江兄弟社 ティエンボ小学校レインボーライブラリー 増田雅暢	山間部の小学校。子供たちに安全な環境とするため、学校用地の整地に時間がかかりましたが、5月に着工。今秋の竣工を目指して建設が進んでいます。 アンラック分校では、9月の新年度から新校舎で学ぶことが出来るようになります。スアンバン本校の「レインボーライブラリー」も新年度までに完成。スアンバン校区の子供たちに、読書の楽しさを知る活動を1年間支援します。写真⑥ 政府からの建設許可があり、工事会社を入札中です。 ベトナムの小学校は、今年は夏休みが1か月短縮され、7月より夏季休暇に入ります。 子供たちに新校舎を早くお届けするべく、協力して進めています。 コロナの影響もありましたが、建設工事は進捗しています。2020年9月の新年度から、新たな校舎で子供たちが学ぶことができます。写真⑦ 創業100周年記念事業で、ベトナムの子供たちに学校をプレゼント。90周年でラオスに、2017年にはタイの学校をご支援頂きました。現在、ベトナム政府へ建設許可を申請中です。 ティエンボ小学校は、現在建設中のゴイカイ分校の本校です。図書館と読書活動を本校に導入することで地域全体の子供たちが本に親しみ、世界を広げたり豊かにする活動を支援します。
建設中	スリランカ アットタットカッタ・ラフラ小中学校 七村 守 ドゥヌマダラフ小中学校 木村達也、廣部武、他 ミーゴタ仏教小学校 エルセラーン1%クラブ ジャヤティラカ小中学校 エルセラーン1%クラブ	民族紛争時に両勢力の境界線にあたり、現在も貧困家庭が多い地域にあります。小中一貫校ですが教室数が足りず、勉強意欲の高い子供たちのために4教室を新設します。写真⑧ 北中部州アヌラダプラにある民族紛争の被害が大きく貧困家庭が多い地域の学校。教室不足で古い校舎の老朽化が進んでいます。子供たちがより良い環境で学べるよう新しい校舎を増設します。 周辺8村から約570人の児童が通う小学校。教室不足のため、校舎の軒下に机を並べて勉強していました。熱心な校長先生が長年にわたり学習環境の改善を待ち望んでいた学校です。 1919年設立の歴史ある小中学校。築80年の校舎がシロアリ被害にあい危険な状態のため、新校舎を建てることになりました。
	ラオス クアセット中学校 新設 WANG基金 藤原和博 （水設備：株式会社ブロードウェイ） ホーコンナイ中学校 増設 山田浩司 （寮：栗飯原匡伸）	地域の5つの村の子供たちが通う中学校。現在は、村人が建てた仮設校舎で授業中ですが、新校舎が整備されれば、より多くの子供が義務教育である中学校を修了できるようになります。写真⑨ 地域の中心基幹校です。毎年、進学を希望する生徒がどんどん増えていることから、校舎を増設、更に学習環境が改善します。先生方のために寮を整備します。写真⑩
	ベトナム バンファ分校 ガハイ分校 タンタイン1小学校 バウ分校 レインボーライブラリー ミンクアン小・ジントイ小・ティエンソン小	子供たちは、山間に散在する集落から時間をかけて山道を歩いて通学します。児童数は239人、2004年建設の校舎1棟があるものの、教室不足のためトタンと木で建てた仮設校舎で学ぶ子供も。 モン族の村。道路状況が悪く、バイクや徒歩によるアクセスとなる。仮設校舎は老朽化しており、雨風や暑さ・寒さをしのぐことができないばかりか、危険。 地域の総合的な教育計画の一環で、2つの分校が統合。新たに本校小学校として整備する計画が進んでいます。写真⑪ タンタイン1小学校の分校の1つですが、児童数は200名近く。午前と午後の半日制での授業を余儀なくされています。現在の校舎を修復し、新たに5教室が必要です。 本校に、図書館を設置。読書週間啓蒙活動を行います。本校だけでなく分校とも連携し、地域の子供たち全体に本との出会いや新たな世界を開ききっかけが生まれます。
	ラオス バヌアン小学校 カダップ小学校 マイバンマセル中高校 増設 チェンサイ小学校 増設 プーパチアン中高校 Phase2	2棟の小学校舎は老朽化が進むばかりか、教室不足のため複式で授業が行われています。村人たちも木材を集めたり、学校用地を拡張するために土地を確保するなど準備を進めています。 20年前に村人が手作りした校舎は老朽化が進み、修理しながら使用しています。 2018年度、新たな土地を生徒たちが造成、新校舎（4室）と寮が完成しました。教室不足を補うため、寮を屋間には教室として使うほか、古い木材を活用して仮設校舎を建てるなどしています。 約10年前に建設された3室と、老朽化した木造の仮設校舎で幼稚園と小学生約150名が学んでいます。シロアリ被害で柱も脆くなっており、危険な状態です。写真⑫ プーパチアン中高校は、「パチアン山」の麓にあり、その名を冠したパチアン郡の基幹校です。老朽化した校舎を建て直し、子供たちが安全に学べる環境をつくりまします。
	計画	

ラオスの子どもたち、飯館村へ行く

AEFAが取り持ったラオスと福島県飯館村とのご縁は、2009年にさかのぼります。飯館村の村づくりアドバイザーをつとめていたAEFA専務理事佐川旭から「飯館村の暮らし方を表す方言『までい(心を込めて、ていねいに)』は、ラオスの人々の生活にも通じる」とアドバイスがあったことから、交流が始まりました。

飯館村の子どもたちは、「ドンニヤイ中学校の建設支援」を開始。募金活動やふるさと納税による活動中に、東日本大震災が発生します。ドンニヤイでは飯館村の人々の心の平穏と無事を祈る儀式が行われ、ACD(ラオスNGO)を通じてお見舞いメッセージが送られました。

ドンニヤイ校の新校舎は、飯館村の村民が長い避難生活を送る中、無事に竣工。2012年、飯館村代表も列席して開校式が行われました。

ドンニヤイ校の校庭に、手作り竹ろうそくを「までいの心」を表すハート形に並べ、日没とともに点灯。用意した発電機が早々にバッテリー切れするというアクシデントもありましたが、村の満天の星空の下、お互いの幸運と世界の安全を祈りました。

その後もご縁はつながり続け、飯館村は、東京オリンピックパラリンピック競技大会におけるラオスの「復興ありがとうホストタウン」になりました。2018年夏にはラオスよりセンドゥアン教育スポーツ大臣兼オリパラ委員長が来村、翌年9月にはパラリンピック水泳選手の事前キャンプを受け入れ、飯館の子どもたちもラオスについての探求学習を進めてきました。

2020年1月、3人の生徒とブンカン校長、サラワン県教育スポーツ局トンバイ副局長が飯館村を訪問しました。ホストタウン



事業の一環で招聘されたもので、生徒たちは、ドンニヤイ校でACDが進める環境活動参加者のなかから選抜されました。

成田空港からNEXに乗り、通勤時間帯の東京駅の人混みをくぐり抜け、自動改札機でひっかかったりしながら東北新幹線のホームへ。迷子にならないよう、先生も生徒たちも緊張の面持ちです。「寒いなんて信じない」と裸足にサンダル履きだったACD代表ノンさんは、新幹線が福島駅に着くやいなやダイソーへ駆け込んで靴下購入。宿舎の大きなお風呂であたたまりました。

到着日に行われた歓迎会では、飯館村とラオスの風景が描かれた「ホストタウンフレーム切手」が披露されました。トンバイ副局長とブンカン校長先生が、「わたしたちは家族です。これからも交流を深めていきましょう」と挨拶。生徒らは伝統衣装で盛装し、伝統舞踊を披露しました。

翌日は、3人の生徒たちが主役になる飯館中学校との交流でした。その日の早朝に雪が降って、飯館村は一面の銀世界に。「一生に一度でいいから雪を見たい」という彼らの願いが通じたのかもしれませんが。みんな朝食もとらずに雪の中を走り回って、足跡をつけたり写真を撮ったり、口に入れて味わったり。宿舎のスタッフも、雪を知らないラオスの人たちのために雪だるまを作ってくれました。

そんなわけで、当日朝に予定していたAEFAスタッフとのプレゼンの確認はできず、ぶっつけ本番になりました。以前招聘した



できあがったTシャツを見せるソムサイ君



村の舞踊を披露するシリヴオンさん(手前)



積極的に英語の授業に参加するロッチャナさん



飯館村の支援で建設された
ドンナイ中学校

左から、ソムサイ君、シリヴォ
ンさん、ロッチャナさん

ドンナイからやって来た子どもたち

ソムサイ君: 日本大好きで独学で日本語や文化を学んでいる。「ずっと日本のことは知っていたけど、今日初めて本物の日本の友達に会えた。これからいっぱい勉強して、今度は自分の力で日本に来たい」

シリヴォンさん: 最年長で物静かなお姉さんの存在。ですが、「雪」をペットボトルに入れて持ち帰ろうとする無邪気な一面も。

ロッチャナさん: 2年前に飯館村の庄司さんと撮った写真を宝物にしている。「いつか絶対、飯館村へ行きたい!」って思っていました。夢が叶って本当にうれしい」

タイの少年が緊張のあまり泣きだしてしまった光景が頭をよぎりましたが、それは杞憂に終わりました。

交流会では、ドンナイ村特産のコーヒー豆の収穫にまつわる舞踊(作業歌)を披露。腰に竹かごをつけ、豆を手摘みで収穫する様子を音楽にあわせて舞いました。続いてパワーポイントを使って村の生活、学校の授業や活動の様子を紹介。順番に発表する3人は落ち着いた様子で、立派なプレゼンでした。

休憩時間には、飯館中のみなさんが、手作りのパクチー風味のオリジナルスムージーをふるまってくれました。

次の時間は、ラオスの学校建設支援者でもある株式会社セブンユニフォーム様のデザイナーによる、オリジナルTシャツ制作のプログラムです。ラオス選手団を応援するときに着用するものです。和風の色合いの布用絵の具を使い、ドンナイの生徒と飯館中の生徒と一緒に仕上げました。

給食を一緒にいただき、午後は1年生の英語の授業に参加。グループにわかれて、建物などのイラストと英語のカードを使って、神経衰弱ゲームのようにあてていきます。ドンナイには「駅」も「本屋」も「デパート」もないので3人はやや苦戦していましたが、積極的に挙手していました。ソムサイ君は「こんなに楽しい授業をドンナイで受けられたら、1年後にはみんな英語がペラペラになるよ!」と興奮気味。翌日、都内を見学している間も、ACDのスタッフを相手に駅を指して「Station」などと練習していました。ロッチャナさんは、東京見学の最中も「飯館村に帰りたい」と言うほど、村が気に入ったそうです。

大役を果たした一行は、充実した表情で帰途につきました。

来日メンバー

Ms トンバイ サラワン県教育スポーツ局副局長
Mr ブンカン サラワン県ドンナイ中高校校長
Ms ノン ACD 代表
Ms ニヤイ ACD 副代表
Ms チャン ACD コーディネーター
Mr ソムサイ、Ms シリヴォン、Ms ロッチャナ

スケジュール 2020年1月

26日(日) ラオスから日本へ。
パクセー空港→バンコク経由
27日(月) 早朝成田着。NEX・新幹線で福島県へ。村の車で飯館村へ。
飯館村菅野村長らと歓迎夕食会。「ホ
スタウンフレーム切手」お披露目式
飯館村泊
28日(火) 飯館中学校訪問、生徒との交流会。
道の駅など村内施設見学。飯館村泊
29日(水) AM: 村民(ドンナイ校の教材やス
ポーツコート)を個人としてご支援) 宅
訪問。
新幹線にて帰京、都内見学。(皇居二
重橋、お台場) 東京泊
30日(木) 帰国へ。
羽田空港見学後、羽田発バンコク着
バンコク泊
31日(金) ラオス・パクセー空港着。帰宅。

報告:金子 恵美

ソムサイ君は、2年前に訪問した際、本で独学した日本語で「コンニチハ。ワタシ ニホンへ イキタイデス」と話しかけてきました。いつか彼を日本に招きたいと思っていました。念願叶った再会の場では、見違えるほど背が高くなっていました。

生まれて初めて地元から出て、気候も環境も全く異なる日本へやってきた生徒たち。車酔い、雪、大勢の人の前でのプレゼン、TV取材など、初めて経験することばかりでしたが、立派にドンナイ校の代表として活躍してくれました。いつも礼儀正しく、自分の意見や気持ちを自分の言葉で、堂々と表現していました。AEFAとドンナイ校とは13年のお付き合いです。飯館村のご支援で中学ができた後は、株式会社フォーサイト様によるご支援で校舎を増設。ドンナイ校は、今では幼稚園~高校までの地域の基幹校になっています。

井戸、スポーツコートの建設、教材やスポーツ用品の支援、奨学金等の支援のほか、昨年度からはボランティアの「環境活動」も実施しています。今回の3人もこのメンバーですが、参加している生徒たちは、活動を通して主体性やリーダーシップ、問題解決能力などを身につけています。それは、学力だけでなく「真の学び」なのだと思います。頼もしい3人の姿を見ながら、これまでのプロジェクトのひとつひとつが連なり、積み重なって生まれた結晶のようだと思いました。

環境問題に限らず、社会課題は一朝一夕に解決できません。しかし、彼ら彼女たち自身がきつと解決策を見出し、地域の未来につながる活動を進めていってくれるのだらうと感じました。

「新型コロナ」の影響を受けつつも……各地で続々と学校完成へ

2020年1月から2月にかけて、タイとラオスで5校が喜びの開校式を迎えました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、3月に予定されていたベトナムの3校(イエンニン・デオムン・キムソ

ン)は、式典の延期を余儀なくされました。ベトナムでは5月から学校が再開しており、子供たちは早速、日本の支援者を迎える晴れの日のために歓迎のダンスの練習を始めています。



タイ メーパン小学校

支援者：
チュラコス株式会社

「私たちは、バンコクで子供にも使えるオールインワンジェルを販売して、多くのお客様に喜ばれています。日本とタイを結んで明るい未来をつくれるキッカケになれば幸いです。皆さんと一緒に仕事をしたり、一緒にご飯食べたりして、チュラコスファミリーになれば嬉しいです」(同社代表 与那覇 翔様)



ラオス ララ小学校

支援者：
藤原和博様
株式会社にしのみあきひろ
(現 株式会社 NISHINO)

ララ小学校は、絵本作家・西野亮廣氏の「えんとつ町のプペル」の印税をご寄附いただいて建てられたため、「SCHOOL OF POUPELLE」と名付けられました。校舎の正面に輝く時計は、同氏の「チックタック～約束の時計台～」をモチーフに、時計職人清水新六氏(ラオス・パシア小学校支援者)により制作・寄贈されました。



ラオス カトウア中学校増設

支援者代表：
石塚勝巳様

「ラオスには調査で数回行ってはいますが、開校式に参加するのは初めての経験でした。メインスポンサーが参加せず、サブスポンサーを代表して私たち夫婦がメインゲストだったので、現地の歓迎もひとしお強く感じられました。現地の喜びぶりを見て、「支援して本当に良かったなあ」と思い、感動さえました」(石塚様)



ラオス ナコック小学校

支援者：
小川栄二様

「生徒や村人達の出迎えにあい、感激の連続感動の3日間でした。開校式がこんなにも大勢の人に準備され、支えられている事に驚きでした。子供たち村人達の喜びは私にも同じ喜びで、生涯忘れられない事です。ラオスのNGOのお陰で一人一人子供たちへお菓子文房具を手渡し出来たのは最高に嬉しい出来事でした」(小川様)



ラオス ムーパッディ小学校

支援者：
立石道博様

大変残念ながら、立石様の渡航はかないませんでした。AEFA理事長らが訪問。この日のために準備してきた子供たちのパフォーマンス(ダンス)や、村人の心づくしのもてなしを受けました。いつか立石様に会えることを、みなさん楽しみに待っています。

WEB ソーシャル経済メディア「NewsPicks」に記事が掲載されました

ザ・プロフェット 藤原和博

「平和の礎となるのは、子どもたちです。キングコング西野さんとの『ラオス小学校』建設物語」

本プロジェクトと開校式の様子をご紹介します。 <https://newspicks.com/news/4863654/body/>

認定 NPO 法人 認定に関するお知らせ

AEFAアジア教育友好協会は、2020年3月25日をもって「認定NPO法人」から「NPO法人」に変わりました。一般のNPO法人とは異なり、認定NPO法人には税制上の優遇措置が設けられています。当協会は東京都からこの認定を受けておりましたが、このたび認定対象外となりました。

当協会が東京都により法人格を認められたNPOであることに変わりはなく、NPO法人としての法人格は継続され、活動もこれまで通り続けてまいります。しかし「認定」が外れたことで2020年3月26日以降の当協会への寄附金・会費が、税法上の寄附金控除の対象から除外されることとなります。ご支援くださっている皆様には大変ご迷惑をおかけすることとなり、誠に申し訳なく、深くお詫び申し上げます。

認定対象外となった理由は、監事が協会事務の一部に携わったことが認定NPO法人の条件の欠格事由に相当するという判定を受けたことです。当協会は運営費を最小限に抑えご支援金を最大限アジアの子供たちのために役立てるため、少人数の職員で事務局を運営しております。昨年度、一時的に事務局体制が逼迫した時期があり、状況を見かねた監事が善意から事務局業務の一部をサポートしたことが欠格事由となりました。

当協会事務局および関係者一同は、法令上の確認が不十分であったことを反省し、早急に事務局の人事体制の見直しやNPO法の再確認および注意点の周知徹底を行って問題の再発を防ぎます。また、NPO法人としての公共性、公益性、健全性、透明性を引き続き高い水準で維持し、皆様の信頼にお応えいたします。

当協会の活動内容や会計処理にはなんら問題がなく、「教育環境の整備を通してアジアの未来を担う子どもたちを育てる」という理念にも変わりはありません。認定の如何にかかわらず、今後もより一層強い信念で活動を続け、アジア地域から持続可能な世界の実現に貢献していく所存です。

AEFAを引き続きご支援くださる皆様に厚く御礼申し上げるとともに、今後ともアジアの子どもたちの未来を築く当協会の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

NPO法人 アジア教育友好協会(AEFA) 理事長 谷川 洋

インタビュー Why AEFA?

菊岡 信義 →→→ 木村 達也

早稲田商学大学院 大学院経営管理研究科 教授

早稲田商学大学院 大学院経営管理研究科 (早稲田大学ビジネススクール)教授。AEFA顧問。企業のブランド・マネジャー、プロダクト・マネジャーなど約20年間の経験の後、日本大学大学院助教授。英オックスフォード大学客員研究員、米コロンビア大学客員フェローなどを経て現職。



理事長の谷川さんに初めてお目にかかったのは、2016年の夏。当時、本業のかたわらでパーソナリティをしていたラジオ番組の収録の場でした。きっかけは、谷川さんが書かれた『奔走老人』を書店で手に取ったことから。それまでボランティアやNPO活動については頭で知っていても、何か自分ごととしてのリアリティがなかったのが、この本を読んで思いが変わったのです。

活き活きとした日々の活動、理路整然と構造的に示された活動理念、学校づくりの先を視野に収めた構想。本を読んで感じた、こうした印象を確かめたくてゲストとしてスタジオにお呼びしたことを思い出します。

その後AEFAとご縁をいただき、昨年3月にベトナム、今年2月にラオスでの現地活動に同行させていただきました。私を感じたのは、ほどよい緊張感と現地の方たちとの温かい交流の入り混ざった感慨深いものでした。

アジアの村に建設した学校は、今年で300校以上になったと聞いています。ただ、谷川さんやAEFAのスタッフの方の話がうかがっていると、その数字以上に大切にしているものをいつも感じます。AEFAの活動が必要とされなくなる「幸せなとき」が来るまで、これからも頑張ってください。私ももちろん応援させていただきます。

次のバトン：藤原 和博さん(WANGファウンダー)

AEFA往来 2020.1~2020.6

1月6日	仕事始め AEFA打ち合わせ会議	*コロナ危機でベトナムの開校式(3月18~26日)をキャンセル	
10日	長野出張 大岡小学校 出前授業(長野篠ノ井ライオンズクラブの皆さん)(金子)	キムソン(柏原東高校様)・イエンニン(一家様)・デオムン(大野様)・モニュー(水野様)・・・今後の対応方針を協議中	
15日	スリランカ2校+タイに契約金の送金	3月16日	AEFA 理事会 谷川・佐川・横江・溝辺・亀井・金子
19~20日	福井出張 エルセラーン福井支部総会200名で講演(谷川)		コロナ対策含め、2020年度活動方針の打合せ
25~30日	タイ出張 メーバン小学校開校式 沖縄よりチュラコス様5名 クンメーナイ・ファイコンなど視察(谷川・溝辺)	18日	東京都庁にて「認定資格更新」につき交渉
2~30日	ラオス・ドンニヤイ中高校生徒他来日 飯館村訪問(佐川・金子)	19日	出前授業の実施方針の打合せ・コロナ対策も含め
2月3~7日	新規支援者対応 スリランカプロジェクト打合せ	24日	ディアーズ・ブレイン社訪問 2020年度支援打合せ
9日	エルセラーンの浜松支部総会(100名参加)で講演(谷川)	4月1日~	テレワーク中心の活動に転換
13日	理事会 2019年度決算報告承認・2020年度予算承認		事業データ整理、ホームページ改訂作業、年間計画の見直し
20~28日	ラオス出張 開校式:藤原様他3名・石塚様・小川様出席 開校式:ワラ(WANG基金+西野様)・カトゥア中(石塚様) ムーパツディ小(立石様)・ナコック小(小川様) 学校視察:カダツプ・カムトーン・プーバチアンなど数校	5月1日~	テレワーク中心の活動継続
			ネットでの合同会議:会報30号の原稿作成や建設/ソフト支援企画
		6月2日	全員出勤 AEFA 活動方針打ち合わせ テレワークも継続しつつ、事務所出勤日の担当振り分け方式

2020年6月14日にAEFAは活動16周年を迎えることができました。皆様のご理解と応援で、事業を継続できていることに心より感謝申し上げます。少数民族の子供たちに学ぶ機会を・・・と始まったプロジェクトから、今では大学へ進学したり留学したり、県で第2位の優秀成績を修める生徒も出ています。学業優秀だけでなく「自分もだれかの役に立てるように働きたい」という気持ちを持つ生徒もいます。

創立当時から関わってきた東南アジア山岳部に於いては、発展が進み様々な変化が急速に起きています。気候変動で洪水被害が増える・道路や橋等インフラが整備され、プランテーションの開発が進むことによりこれまでの生活基盤たる田畑や森が減少する・物流や人の流れの激増により人身売買やドラッグ問題が増える・ごみ問題や環境破壊・都市部との経済格差が進む等、発展による良い面ばかりでなく、新たな課題が多く見えてきました。また、新型コロナウイルスの影響で、社会全体がこれまでの生活様式や価値観から「新しい日常」へと変容しています。

こういった大きな変化の時に、改めてこれからどこに向かって歩むのかを再設定し、そこへ向かって集束していく時と考えます。学校建設や教育環境整備は大事な基盤ですが、加速度的に変化する現場の状況

を細やかに把握し、コロナへの対応や子供の権利、環境問題等「今、必要とされるプロジェクトを推進する」ことが重要です。

そのためにも、理念を共有する「パートナー」である各国NGOとの協働が大切です。今後は更に「パートナーシップ」を尊重し、日本国内も含むアジア各地域で、関わる人全てが共に学び合い、助け合いながら、持続可能な世界を次世代につないで参ります。大人・子供、男性・女性、受益者・支援者等の区切りを心の中でもつけず尊重し合い、誰もがそれぞれの立場で自分の役割を精一杯果たすことで、よりよい世界を共につくっていくことを目指します。これは、「持続可能な開発目標:SDGs」の「教育」と「パートナーシップ」に特に関連するものです。

学校建設事業もまた大きく変化しています。ラオスでは輸出のための乱伐が続き、伐採許可がおりないと自分の村の森も切ることができませんが、以前は村人が村の森の木を伐採して木造校舎の壁や梁の材料として協力提供していました。建設材料費が節約でき、村人も製材の技術を身に付けることができました。二重屋根の木造校舎は風が通って涼しく、太陽の光が射し込む明るい教室でしたが、今は鉄筋コンクリート造が殆ど。電気の通る地域も広がったため、蛍光灯や扇風機の支援も必要になっています。

改めて、「学ぶ」・「集う」という学び舎本来の機能を大切に、地域の風景や伝統を織り込むようなデザインを共に考え、地域のシンボルとして記憶に残る学校づくりを目指します。

支援者の皆様はじめAEFAにかかわってくださる方々もまた、ともに学び、成長しあえる未来を目指す大切なパートナーです。今後も変わらぬご支援を、どうぞ宜しくお願いいたします。



これからのAEFAが目指すもの 2020
Tanikawa's Notebook 理事長・谷川洋



私たちは各国のパートナーNGOと手を携えて活動しています。

- ベトナム: Vietnam Assistance for the Handicapped (VNAH)
Saigon Children's Charity (SCC)
Research & Communication Centre for Sustainable Development (CSD)
- ラオス: Association for Community Development (ACD)
- タイ: Raks Thai Foundation (CARE Thailand)
- スリランカ: Rotary Club of Colombo (RCC)

